

# 上原 美術館 通信

No.  
**13**

編集・発行 公益財団法人上原美術館  
2021年4月9日発行(季刊年4回発行)  
公益財団法人 上原美術館  
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
Tel. 0558-28-1228  
[www.uehara-museum.or.jp](http://www.uehara-museum.or.jp)



作家・谷崎潤一郎は1933(昭和8)年、随筆『陰翳礼賛』を著しました。そこでは近代化の波に覆われつつある日本が直面する光と影についての葛藤と考察が綴られています。それから九十余年後の現在、日常を取り巻く光はさらに明るさを増し、影はその存在を潜めています。しかし、身の廻りを見渡すと至るところに影の存在があることに気づきます。身近なうつわやペン、そして自分の手を改めて見つめると光の傍に影があらわれます。そして、その影に気づけば、ものの存在が今までとは異なってきたかたちであらわれてきます。

「美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを餘儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に沿うように陰翳を利用するに至った」。谷崎は日本における美のあり方について、そう語っています。例えば、黄金が日本家屋の暗がりや放つ美しさを次のように述べています。「庭の明かりの穂先を捉えて、ぼうっと夢のように照り返している」、「私は黄金と云うものがあれほど沈痛な美しさを見せる時はないと思う」。金箔が施された仏像は、もともとお堂や厨子の暗がりやで拝まれていました。そうした仏像は陰翳の中でこそ本来の姿があらわれてくるのかもしれません。

絵画もまた、もともと明るい壁に飾るものではなく、薄暗い建物内で鑑賞されていました。特に日本家屋では床の間で鑑賞する掛軸が「陰翳に深みを添える」ものとして尊ばれてきました。そうした歴史的背景を持つ日本画には、暗い建築空間に広がるような繊細な余白の表現が殊のほか美しくあらわれています。



十一面観世音菩薩像 平安時代(10世紀) 重要美術品

このような陰翳の感覚を持つ日本人にとって、西洋の油彩画を描くことはひとつの新たな挑戦でした。京都帝国大学で西洋の美学美術史を学んだ須田国太郎もそうした画家のひとりです。須田は1919(大正8)年にスペインへ渡り、プラド美術館などで伝統絵画の明暗表現を学びました。帰国後、京都にある日本家屋の四畳半で制作し続けた須田は、日本独特の深い陰翳を纏った油彩画を生み出していきます。

本展では上原コレクションの仏像や絵画から陰翳の中に潜む美の魅力に注目します。闇を柔らかく照り返すような十一面観世音菩薩像や阿弥陀如来像をはじめ、日本の物語に潜む闇を余白に描き出した小林古径の日本画、油彩画の陰翳に独特の深い存在感をあらわした須田国太郎の絵画などをご紹介します。

上原美術館は大きな美術館とは異なり、日本家屋のような小ぢんまりとした空間が特徴です。仏教館はお堂のような佇まいがあり、近代館は邸宅のような空間が広がります。それは個人コレクションが出発点であるからこそその空間です。今回の展覧会では、こうした空間がもつ陰翳の魅力にも注目します。

2017年のリニューアル以来、上原美術館では仏像や絵画に寄り添う光を模索してきました。光は強くすれば、影もまた強くなります。明るい光をあてられた仏像は一瞥ではよく見えているように感じますが、実際には顔の影や衣文のひだは暗く潰れ、本来の仏像の存在感が消えてしまいます。当館では仏像そのものが放つような柔らかな光を目指



須田国太郎《牡丹》1941(昭和16)年 新収蔵・初公開

して、細心の注意を払って照明を行っております。一見暗く見える照明の中でも、陰翳を見つめていると、次第に仏像本来の存在感がゆっくりと浮かび上がってきます。館内はやや暗い印象もあるかもしれませんが、こうした陰翳の魅力を引き出そうとする試みでもあります。また、館内には部屋ごとに異なる光空間が広がっています。仏教館では、天井が高く明るい仏像ギャラリーから、やや暗い回廊を通して、天窓のような光が降り注ぐホワイエの向こうに寺院の堂内のような仏像の美を包む陰翳が広がっている、そうした空間のストーリーもお楽しみいただければと考えております。

西洋から来た油彩画も光によってその存在感が大きく変わります。「なぜ東洋西洋と違った方向に向いて絵が発達したのだろう」。画家・須田国太郎はそのような疑問を出発点に伝統絵画の明暗表現を研究します。油彩画は透明な油膜を持つ絵具層を幾重にも重ねた立体的な構造であり、単調に見える陰翳の表現も実際にはさまざまな色彩が重ねられ、豊かな絵画空間を内包しています。須田の絵画に描かれた陰翳をじっくり見ると、そこから色彩が浮かび上がり、それに気づいた途端、明かりが灯るように画面全体が輝き始めます。陰翳に寄り添うことは、すなわち絵画の奥に広がる空間へ足を踏み入れることへと通じているのかもしれません。

さて、『陰翳礼賛』を記した谷崎潤一郎はどのような美を愛でたのでしょうか。上原コレクションには谷崎旧蔵と



小林古径《芥川》1926(大正15)年頃 新収蔵・初公開

伝わる一点の日本画があります。それは小林古径が描いた《杪秋》です。秋を迎えた木の梢に色づいた柿がたわわに実ります。枯れ葉が落ちる地面には一匹の猫が空間を引き締めています。それらを取り巻く余白は日本家屋の空間に広がるようであり、谷崎が愛した美の姿が想像されます。

また、当館では小林古径が伊勢物語に画題を求めた《芥川》を新たに収蔵しました。物語は、主人公が思い続けた女性を連れて逃げた夜、鬼が現れてその女性を食べてしまうというものです。墨のぼかしの中にうっすらと現れる鬼は金泥による繊細な線描で描かれており、薄暗い闇に浮かび上がる気配を見事にあらわしています。

この展覧会では平安時代の仏像から近代絵画まで、東洋西洋のジャンルを越えた陰翳の魅力をご紹介します。現代に生きる我々にとっての『陰翳礼賛』をお楽しみいただければ幸いです。(土森)



須田国太郎《烈日下の鳳凰堂(平等院)》1936(昭和11)年



小林古径《杪秋》1951(昭和26)年 谷崎潤一郎旧蔵



上原美術館ではこの春、木造の狛犬一躯を収蔵しました。本像は像高28.6センチ、体長28.3センチ。両手で抱き上げられる大きさの愛らしい像です。狛犬は口を開ける像と、閉じる像の阿吽一対からなりますが、本像はこのうちの閉口像。全身を檜と思われる針葉樹で造る一本造りの像で、尾を別に造って寄せています。表面は現状では黒漆を塗り、金箔を貼っており、かつては金色の像だったようですが、像底を見ると古い布張り下地が残っているため、当初は彩色像だった可能性があります。

肋骨の浮き出た体、力強く大地を踏む前足、胸の筋肉の盛り上がりには充実した力が籠り、目を見開き、閉じた口に牙をあらわすさまは、悪を寄せ付けまいと身構える姿ですが、どこかユーモラスです。古風を留めるとはいえ、温和な作風から、本像の制作年代

は平安時代後期と考えられています。

狛犬といえ、神社境内の石像が有名なので、日本古来の神道独特のものと思われる方が多いかと思えます。ところが狛犬は、開口像を獅子、閉口像を狛犬と呼ぶのが正式。つまり片方はライオンであり、一方の狛犬の名も、「狛(高麗=海外)から来た動物」からきているとする説が有力なので、やはり大陸伝来の霊獣という意味です。狛犬には一本の角があり(本像には見られません)、獅子にはないといいますが、両者ともに豊かなたてがみがあるなど姿はよく似ており、いずれにせよともにライオンであることは明らかです。ライオンは日本にはいませんから、狛犬は、遠い異国からやってきたのです。

日本に伝来した狛犬の故郷は、仏像発祥の地であるインド・マトゥラー地方、ガンダーラ地方。これらの地の釈迦の台座に刻まれた一対の獅子が狛

犬の原型ですが、その起源はさらに、メソポタミア文明やエジプト文明に遡るといいます。シルクロードを通過して中国・朝鮮半島、そして日本に到達した獅子は、寺院を守る本来の役割のほか、平安時代、天皇や貴族の御簾が風にあおられるのを防ぐ鎮子として用いられ、同時に災いを防ぐ役割も期待されました。その一方で獅子は、神社にも置かれ、神前を守り、日本の神々に仕える霊獣となったのです。木造の狛犬は古い像が多く、神社に伝えられるものがほとんどです。本像もかつては神前を守っていた像と考えられます。

本像は上原コレクション初の神道美術ですが、狛犬は壮大な東西交流の結晶でもあります。愛らしい本像は、日本とアメリカ、そしてロシア。幕末異文化交流の舞台となった伊豆下田にある美術館に相応しい作品といえるでしょう。

モネは1883年、43歳のときにパリから北西80kmほどのジヴェルニーに移り住み、86歳で亡くなるまでこの地に暮らしました。そこで広大な庭を手に入れ、自らの理想郷を作り出していきます。その一つが太鼓橋の架かる睡蓮の池です。藤棚のある橋は、モネ所蔵の浮世絵をモチーフにしたと言われています。

このジヴェルニーのモネ邸を訪ねたのが黒木三次、竹子夫妻です。黒木三次(1884-1944)は陸軍大将伯爵、黒木為楨の長男として生まれました。学習院中学時代の親友には志賀直哉がいて、その交流は生涯続きます。三次は東京帝国大学を卒業後、横浜正金銀行に勤め、1918(大正7)年、34歳のときに大蔵省委嘱による国際金融調査のためパリに向かいます。折しも第一次世界大戦が終結に向かい、日本につかの間の好景気が訪れる頃でした。三次は渡欧後間もなく、モネのもとを訪れるようになります。

竹子夫人(1895-1979)は三次に遅れてフランスへ船で向かいました。竹子は元首相松方正義の長男、松方巖の長女にあたります。三次は竹子と合流すると、夫婦でモネを訪ねます。モネは竹子のことを孫娘のように可愛がりました。竹子は晩年、次のように回想します。「モネさんは、モネさんの希望でいつも和服姿でお伺いしていた私を、すぐ嬉しそう

に両手をおひろげになり、両腕の中に抱き込むようにして歓待の挨拶をされたものです」(『読売新聞』1973年4月19日)。竹子はモネの家族とも親しく、夫がパリを離れるときにはジヴェルニーに泊まることもありました。三次はモネから「池の藤の花が美しく咲いたから午餐をともにしないか」との招待を受けたことがあります(黒木三次「白雲荘雑記」『青雲白雲』1940年6月20日)。そこにはフランスの首相を務めたモネの親友ジョルジュ・クレマンソーも訪れていました。その後、三次はクレマンソーの自宅を訪れるなど交友を深めます。ジヴェルニーで撮影した写真からは彼らの親密な様子が垣間見えます。

黒木夫妻はモネから直接、作品を譲り受けることもありました。その一つが当館所蔵の《雪中の家とコルサース山》です。竹子の回想によると、この作品はモネも気に入っていて、譲る際にペンでサインを入れたそうです。そのときの記念写真が今も残されています。そこにはモネがノルウェーから「富士山を思わせる」と手紙を送った義理の娘ブランシュ・オシュデも一緒に写っていて、時を越えた不思議な縁を感じさせます(『上原美術館通信』No.12参照)。そのほか、《黄昏、ヴェネツィア》(アーティゾン美術館蔵)も黒木夫妻がモネから直接購入した作

品です。この作品は竹子がモネにお願いしてようやく譲ってもらったというエピソードが伝わっています。

1920年代前半、多くの日本人が渡仏し、モネの作品を購入するようになりました。その一人が竹子の叔父にあたる松方幸次郎です。川崎造船の社長を務めた松方は美術館建設を夢見て、絵画購入に莫大な資金を投じます。黒木夫妻とともに訪ねたモネ邸では、十数点を一度に譲ってもらったといえます。そうして集められた松方のコレクションは国立西洋美術館の礎となりました。

黒木夫妻は1922(大正11)年に帰国しました。間もなくモネの依頼により日本から牡丹を送ります。それはジヴェルニーで美しい花を咲かせたといえます。三次は帰国後、友人の志賀直哉を通じて、岸田劉生や梅原龍三郎らに自らのコレクションを見せました。まだ西洋絵画の少なかった当時の日本では実物の西洋絵画を見る貴重な機会でした。

《雪中の家とコルサース山》はその後、幾人かのコレクターを経て、2005年に上原美術館に収められました。この作品が今、モネの愛した日本、そして浮世絵を通じて夢見た富士山の近くにあるのも、場所や時間を越えた不思議な縁を感じさせます。



《雪中の家とコルサース山》を囲んで、左から黒木竹子、クロード・モネ、モネの義理の娘ブランシュ・オシュデ。右からモネの義理の娘ジェルメーン・オシュデとその娘。黒木三次撮影



左から黒木竹子、モネ、モネの孫リリー・パトラ、ブランシュ・オシュデ、ジョルジュ・クレマンソー。黒木三次撮影



満開の花が咲き誇る藤棚のもと太鼓橋を渡るクレマンソーとモネ。黒木三次撮影

出張授業

静岡県立伊東高校城ヶ崎分校 2020年12月10日  
 西伊豆町立田子小学校 2020年12月18日  
 静岡文化芸術大学 2021年2月2日 ※オンライン講座  
 静岡県立稲取高校 2021年2月18日

静岡文化芸術大学の博物館学の講座では田島主任学芸員が「学芸員の仕事」についてオンラインでお話しました。

授業入館

下田市立下田東中学校 2021年2月2日  
 下田市立稲生沢中学校 2021年2月5日  
 下田市立浜崎小学校 2021年2月9日  
 下田市立稲梓中学校 2021年2月18日

中学校3校は奈良・京都方面への修学旅行の事前学習のため来館しました。浜崎小学校は東京方面への修学旅行が中止となったため代替授業の一環として来館しました。

博物館実習受け入れ

2021年2月3日、9～10日、16～17日、24日  
 今年度の博物館実習は、1名の受け入れを行いました。

調査

伊豆の国市内寺院 2020年12月15日  
 河津町内寺院 2021年3月6日

伊豆の国市教育委員会の依頼で、田島主任学芸員が授福寺毘沙門堂仁王像、国清寺の視察調査を行いました。

講演

江戸城石垣石切丁場跡セミナー講演(熱海市教育委員会主催) 2021年1月24日  
 河津町仏教会講演 2021年1月27日

田島主任学芸員が、熱海市で土沢地藏堂に伝わる地藏菩薩像についてお話ししました。胎内に残された木札から判明した仏像の制作年や、制作の背景についての内容となりました。また河津町仏教会では、河津町内寺院における最新の調査報告を行いました。

受賞

伊豆半島で分野を問わず、功績を挙げた個人や団体を顕彰する伊豆賞(伊豆新聞社主催)に、当館の田島整主任学芸員が選ばれ、3月3日に授賞式が執り行われました。副賞として、彫刻家の重岡建治さんより受賞者をイメージして制作されたブロンズ作品《慈愛》が贈呈されました。田島主任学芸員は、鹿島美術財団の助成により、河津町谷津の南禅寺仏像群が造像された背景に新たな視点で取り組み、論文を発表しました。また長年、伊豆地域の仏像調査による文化啓蒙活動が、伊豆賞の受賞へつながりました。



リモート授業

2021年1月7日に発出された新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言を受けて、首都圏を経由される教室の先生方にはご来館を自粛していただくことになりました。そうした状況下において、デッサン・水彩画教室、日本画教室はリモート授業という新たな試みを行いました。移動制限が出ていない静岡県内の受講生の皆さんには会場にご来場いただき、先生にはウェブ会議システムで参加いただきました。

リモート授業は先生も受講生の皆さんも初めての体験ですが、事前の想定以上にスムーズなコミュニケーションを行うことができました。デッサン・水彩画教室では、小野憲一先生のアトリエより石膏や水彩画材を使いながら指導を行われました。日本画教室では牧野伸英先生がご自身の制作の様子を手元カメラで紹介されたほか、岩絵具や顔彩などを説明する特別企画も実施し、リモート授業ならではの試みも行われました。先生からは「受講生の皆さんが自分自身で分からないことを言葉で説明しなければならないため、制作を客観的に振り返るよい機会になった」というお話もありました。受講生の皆さんも、リモート授業に前向きに取り組んでくださいました。

新型コロナウイルス感染症の終息を願いつつ、受講生の皆さんが通常どおりの制作ができるよう、引き続き美術館としてできる限りサポートしていきたくと思っています。



美術館  
 周辺さんぽ②

地区の信仰を伝える石造物



美術館の第2駐車場から美術館へ上る階段の横に、もう1つ、隣接する向陽寺へと続く古い石段があります。石段の脇には、いくつもの石造物が並び、その中の角柱の石塔は、地域の庚申信仰の形跡を物語る庚申塔。5基が並ぶ庚申塔は古いもので寛政12(1800)年、新しいものは昭和58(1983)年です。石塔の上に笠が載っている江戸時代の2基は、両側面に鶏の浮彫がされており、一部は苔に覆われていますが、鶏がなんとも可愛らしい姿をみせています。

庚申は十干十二支の組み合わせで、60日に1回巡ってきます。人の体には、天帝から遣わされた三尸虫が住んでおり、庚申の日の夜に人の体を抜け出して、天へ昇り、宿主の行状を天帝に伝えると言います。天帝に悪い行いを報告されると、寿命を短くされてしまうため、庚申の日の夜は、みんなで集まり、三尸虫が天界へ上らないよう、寝ずに過ごすという行事をしました。また60年に1度、庚申の年が巡ってきます。当館が所在する宇土金地区の庚申塔は、この庚申の年を記念した塔で、集落の人々が建てたものです。今はもう行事もないようですが、立ち並ぶ庚申塔は、往時の地区の人々の信仰をうかがわせます。

(櫻井)

## 伊豆だより



河津桜の時期も過ぎ、伊豆の山にはさまざまな山桜が咲いています。美術館の窓からは、木々の間からこぼれる山桜の花が、パッチワークのように見え、とても綺麗な風景が広がります。また美術館の庭にも暖かな気候とともに春の気配がやってきました。魚籃観音が見下ろす館庭の池では、鯉を飼育していますが、ちょうどゴールデンウィーク前後に産卵を始め、稚魚が育ちます。実は鷺などの鳥が来て、鯉を食べてしまうことがあり、この3年ほど、学芸員数人で鯉を殖やす取り組みをしています。館庭の池にいる小さな鯉は、昨年にも生まれたもの。すくすくと大きな鯉に成長できるように見守っています。

(櫻井)

## 出品予定の展覧会



### 須田国太郎展 ～油彩と能・狂言デッサン～

2021年4月7日(水)～5月16日(日) 中信美術館、京都

京都の中信美術館でこの春、須田国太郎展が開催されます。本展は須田国太郎の遺志を継いで設立された一般財団法人きょうと視覚文化振興財団と京都新聞の共催により開催される、須田国太郎生誕130年、没後60年を記念する展覧会です。

須田国太郎の代表作である京都国立近代美術館所蔵の《鶉》や《海亀》、東京国立近代美術館所蔵の《法観寺塔婆》や《窪八幡》など油彩画約20点が出品されるほか、大阪大学が所蔵する能・狂言デッサン等が出品される予定です。当館からは須田が17歳の時に描いたスケッチブックを出品します。このスケッチブックには最初期に描いた能のデッサンが収められています。

本展はもともと、京都中央信用金庫創立80周年記念事業としてちょうど1年前に開催予定だった展覧会ですが、新型コロナウイルス感染症の影響により延期となり、2021年の開催となりました。生誕130年を迎え、須田国太郎の画業を振り返る重要な展覧会になりそうです。

(土森)

\*一般財団法人きょうと視覚文化振興財団は、須田国太郎のご遺族の寄付により2019年に設立された団体です。機関誌『視覚の現場』の発行や展覧会・講演会の開催、若手研究者や作家の支援などを行っています。

\*大阪大学附属図書館は、須田国太郎のご遺族より寄贈を受けた能・狂言デッサン5,000点をウェブサイト「須田国太郎 能・狂言デッサン」にて公開しています。演目、演者、会名、上演日などで分類された重要な研究資料となっています。

<https://www.library.osaka-u.ac.jp/web/e-rare/suda/index.html>

## 広報

3月21日に放映されたBS朝日の開局20周年記念特別番組『あなたの街の名画を旅する』(21:00～22:54)で上原美術館とクロード・モネ《雪中の家とコルサース山》が紹介されました。

次回休館日は2021年4月19日(月)～4月28日(水)です(展示替えのため)



上原美術館  
Uehara Museum of Art

開館時間  
9:30～16:30  
最終入館は16:00まで

休館日  
展覧会会期中は無休  
展示替え日のみ休館

入館料  
大人/1,000円、学生/500円  
高校生以下無料 \*団体10名以上は10%割引